

酒田大火

冬の使者、白鳥の先遣隊が新潟県の瓢湖に飛来して冬間近を感じさせた翌日、発達した低気圧が日本海に姿を現わし、冬疾風(はやて)のごとく韋駄天走りにオホツク海に抜けた。一〇年前の一〇月二九日の夕刻、冬しぐれとともに吹いた強い西よりの風で広がった火災が一気に酒田の街を襲つた。

酒田は秋田と新潟のほぼ中間に位置し、東北の大河の最上川が日本海に注ぐ河口の港町である。江戸時代には日本海航路の北前船の拠点の港として繁栄し、藩主をしのぐといわれた豪商、本間家で有名な街であり、写真家の土門拳の故郷でもある。市内には旧本間邸や旧本間家別荘であった本間美術館や郊外には土門拳記念館があり庄内平野越しに聳える鳥海山を借景とした庭園が見られる。まさに日本海から吹きつける西よりの海風はなのも遮るものがない。

秋の陽はツルベ落としとなり夕闇迫る午後五時四〇分過ぎ出火した火災は、急激に発達してた低気圧に吹き込む西南西の強風にあおられ手のつけようもなく広がつた。最大瞬間風速二六・六メートルを記録した強風によつて火炎は地を這い、舞い上げられた火の子というより火の塊が風下

の街並みを襲つた。低くたれ込めた雲から冬時雨が舞うなか火炎が夜空を焦がし続けた。

酒田大火の記録によると当時消火にあつた消防士は煤の混じつた雨が強くなってきた。おおかたの火の子は西風にのつて東へ飛んでいるのに、数個の赤い大きな火の塊だけがゆづくり北の方に飛んでいった。どこまで飛び火するのかと「瞬がく然とした。だがよく見ると鳥だ。白鳥らしい。炎が反映したために真っ赤に見える白鳥。不吉な悪魔の化身のように見えた白鳥に底知れぬ不安を思え……」と当時の不気味さと不安を振り返つていた。

流れる川を最後の砦にして延焼防止の水のカーテンを張つて飛び火を防ぎ、そして市内の延焼をくい止めたのは、旧本間邸の庭の大木と土壠と土蔵であつたという。二二〇戸を消失した酒田大火は半日燃え続け明け方まえに鎮火した。本格的な雪降りとなる前は秋の深まりとともに低気圧の急発達による大火の危険はまだまだ続くので注意が必要である。

(村松 照男)